

## ヘンリー・エズモンドの成立

一八五二年の十月、サッカレーはアメリカ講演旅行の旅に立たんとして、リヴァプールの港におもむいたとき、丁度出版された、ヘンリー・エズモンドの一冊を手にして、

Here is the very best I can do, and I am carrying it to Prescott  
as a reward of merit for having given me my first dinner in  
America. I stand by this book, and am willing to leave it where  
I go as my card.

と云つたと云ふ事である。

この *History of Henry Esmond* は一八五一年の前半から、千八百五十二年の後半にかけて執筆されたものであつて、彼の作品の中で、書き下しの形をとつて世にあらわれた唯一のものである。そして *English Humourists* のアメリカに於ける講演旅行に出かけようとする、出發一、二時間前に、その二三冊の *Advance Copy* が、サッカレーの手許に届けられたのであつた。

ヘンリー・エズモンドは、その緊張せる結構と云い、又その雄大な歴

ヘンリー・エズモンドの成立

## 白 田 昭

史的背景の利用と云い、更に又巧みな十八世紀のスタイルに摸した文體と云い、サッカレーの諸作品の中の一つのピークを形成するものである事は、私の云々する迄もなく、諸家のすでに認めて居る所ではあるが、ここに屋上屋を架する事を敢えてし、このヘンリー・エズモンドなる小説の成立経過を追つて見たいと思う。

サッカレーは一八一一年に生れ、一八六三年にこの世を去つて居るが、彼が矛盾せる二重性格的な作家であつた事は、今日迄一應の通説となつて居る様である。即ち彼の反對者は、彼をシニクであると攻撃し、一方所謂 *Thackerayan* は彼を溫かい *Sentiment* の持主であるとして擁護した。ところが二十世紀に入ると、價值判斷の基準は全く一變し、サッカレーはシニカルな風を装いながらも、内面は鼻持ちならぬセンチメンタリストであるとされた。この様なサッカレー評價の起る事も又當然であつて、彼がシニカルな面とセンチメンタルな面とを、合わせ持つた人間であつた事は、すでに早く *Charlotte Brontë* が、サッカレーの

作品には右にはメフィストフェレスがひかえ、左にはラファエルが立つて居ると述べている所よりしても明らかな事である。そして最近に於ては *J. Y. T. Greig* が、その著 *Thackeray, A Reconsideration* に於て、サッカレーは Ambivalent であるとして

It is little use quoting sentimental passage from his writings to persuade us he is no cynic; since what we have a right to complain of is that the sentimental in Thackeray alternated with the satirical. There was no fusion, no reconciliation of the two. ①

と斷を下し、サッカレーは Satirical Monitor と Sentimental Comforter の間に立ち迷い、一生安定した思想もなく、常に宗教道德政治藝術の問題に關し、定見を持ち得なかつた哀れな人間であつて、十九世紀の Moral Code を全的に受け入れ、その安定した基礎の上に立つて、着實に進んで行く事も出來ず、そうかと云つて反對にそれを全く拒否して、自分を反逆者なりと宣言する事も出來ない中途半端な態度を取つて居たが故に、同時代人にとつてはサッカレーは Enigmatic であり、disturbing な存在であつて、我々二十世紀人の目には彼は hesitant and poor-spirited な作家としかうつらないのであるとして居る。果して、サッカレーの Satire と Sympathy に分裂した二つの性格の間に、何等の融和もなかつたか、それを統一するものが全然認められないか、と云う事は、この著者の云う様に簡單には割り切れないものがあるが、サッカレーの中には二つの相矛盾せる氣質の相剋のあつた事は、事實として認められるであらう。

さて、この彼の中にひそむ矛盾と云うものは、色々の異つた形態をと

つて現われた。或るときには、貞淑な女性を、「天が下に開く花の中で最も美しき花」であり、「惡を爲す事を、一度も心に浮べた事のない様な、讃嘆すべき清らかさを崇めて、我々はその前に跪くのである。」と言葉を極めて賞揚しながらも次には美德と云うものを、誘惑を感じる心の缺けてゐる事だ、と規定し、Virtue を云うに Healthy dullness とか cheerful insensibility とか that great anodyne なる言葉を以てする等と、全然逆の價值判斷を下して居り、それと同じ様な理由で *Ivanhoe* の後日譚と銘打つた *Rowena and Rebecca* に於ては、貞節であらゆるものを割り切つて行く *Rowena* を icy, faultless, prim, minny-pinny *Rowena* と呼んで居るのである。

この *Rowena and Rebecca* は原作の構成を巧みに用いながらも、その結末を全然逆のものにしてしまふと云う、サッカレーが最も得意とした parody の一典型であるが、これと同じ様な効果をねらつたものに、*Willow Tree* なる Ballad がある事は、一九五三年秋京都大學英文學會に於ける京學大服部教授の講演にすでに述べられた所である。この *Willow Tree* なる Ballad は元歌、換歌ともにサッカレーの手になるもので、元歌の方は、戀にやつれた乙女が、池の邊に生える一本の柳の下に身を投げると云う、極めて pathetic な歌であり、これ文でも或程度の鑑賞に耐えるものであるが、サッカレーは唯單に sentiment の高揚のみに満足する事は出來なかつた。彼の中にある Satirical なものは、この高揚した sentiment を地上にたたき落さずには居られなかつた。それ故、換歌の方は、その娘が夜になつても歸つて來ないのでびつくりした兩親が、大騒ぎをして夜を明かした所へ娘が歸つて來て、戸の鍵を持つ

て出るのを忘れたから叔母さんの家に泊つて來た、と告げると云う元歌の極めて高揚された pathos から、一轉して bathos のどん底へ落ち込んで行くと云う、pathos から bathos への「サッカレー的墜落」と服部教授の評された過程に皮肉な笑いを求めたものである。サッカレーはこの過程を Cynical Philosophy と名付け、それを this contrast between practice and poetry, between grand and versified aspirations and every day life と定義してゐるが、サッカレーはこの Cynical Philosophy の持主だつたのである。

若し、grand versified aspiration だけを持つてゐるのならば、あらゆる地上的な、現世的なことは無視して、理想美の世界に没入することも可能であり、又逆に every day life のみをしか見得ない人間ならば realistic な又 naturalistic な作家として立つ道も開けてゐるであらう。然し幸か不幸か、サッカレーはこの二つの特性を兼ね備えて居た人間であつて、彼の詩心は或るときには天空高く氣高い飛翔を續けて居るが、次の瞬間には何かの動機によつて、急轉直下汚れた地上に墜落するのである。そして墜落した彼の心は一瞬間前には高きに憧れて居た自分の、現在の哀れな姿を見て、自嘲の笑いに自らを慰めるより他に道を見出せなかつたのである。ディッケンズが貧しい靴墨包装工から身を起し、自分の努力一つに頼つて、立志傳中の人となつたのに對して、サッカレーは相當の遺産を持つて、幼くして父を失つた以外には何一つ申し分のない恵まれた環境に生れながらも、自分の怠慢の原因する所も多かつたとは云え、ケンブリッジを卒業し得ず、遺産を費消し、愛して結婚した妻は二兒を残して發狂すると云う様に、實世間で味わつたものは皆幻滅ばかりであつた。サッカレーは高い理想への憧れを常に有しながらも、自分の心に思つて居た事が常に無慘にも打ちくだかれる悲しみを味つて居た丈に習性となつて、彼の心の中には、理想に憧れる自己と、もう一つ他にその理想に向つて努力する前から、幻滅を豫想し又期待する自己との二つの自己が、相並んで存していた。

失戀の甘い悲しみにひたつて居ても、戀する女を頭の中で理想の女性に昇華し、その美しさを讚美して有頂天になつて居ても、美しい音楽に耳を傾け、又教會の鐘の音に誘われて、清らかな瞑想にふけて居るときも、暫らくは忘れられていたもう一つの自己は彼の心の戸を叩き、それらのものが如何に、清らかに高貴なものであつたにしても、それらは所詮愚しい白晝夢であり、實現不可能の空中樓閣に過ぎぬと囁くのである。

この様にして彼は丁度ベンデンスが貞淑な女性ローラとフラッパー令嬢ブランシュとの間に、そしてヘンリー・エズモンドがレーチェルとベアトリックスとの間に立ち迷つた様に、この二つながらに並存する自己の間の去就に迷つたあげくに、結局一應は否定的、破壊的な自己に身を委ねた様な形で、この世のすべては空しきものなりとする “All is Vanity” と云う結論に到達したのである。

然し十九世紀は人心が何等かの意味で、進歩思想に鼓吹された建設的な時代であり、世人は皆各自自らの抱く一つの肯定的な信念によつて、建設的な努力を續けた時代であつて、世紀末から今世紀にかけての全くの虛無思想は、未だ生れ出ざる餘地のなかつた頃であつた。そしてサッカレーも又例にもれず時代の子であり、彼が自分の作品のライトモチーフに用いた、この傳道之書の冒頭の一句も、決してすべてのものを虚し

いと否定するのではなく、「我わが手にて爲したる諸々の事業および我が勞して爲したる勞苦を顧みるに、皆空にして風を補ふるが如くなりき。日の下には益となるものあらざるなり。」と云う絶望の時にあたつても、傳道者はやはり神の正義が虚しからざるものとして、此の世に存在する事を述べ、そこに心の和らぎがある事を示している様に、サッカレーも人間の世は空の空なるものに満ちた虚榮の市であると云いながらも、そこにやはり何か空ならざるもの、建設的、肯定的なるものを認めずには居られなかつた。

そして彼にこの虚榮の市なる人間の世に於ける、空しからざる救いの道を與へたものは、女性の愛と云うものであつた。サッカレーの父は彼が物心のつき始めた四歳の頃に死亡し、それから二年間四歳から六歳迄を母親の鐘愛を一身に集めて、彼は成長して行つたのであつたが、一八一七年教育の爲、印度から本國に送り返えされ、本國の親類に預けられ、學校に入る事となつた。片親それも女親の愛を獨占し、女手だけで育て上げられたこの over-sensitive な子供にとつては、十九世紀初頭の野蠻な英國の學校生活は耐え難いものであつた事は容易に想像される事であり、サッカレーが後になつて、あの頃には毎晩寝る前にどうかお母様の夢が見られます様にと祈つて寝たものだと言懷して居る様に、子供の小さい頭一杯に、海の彼方の母親のイメージを描き上げていたのも當然の事である。そしてこの子供の頃に描き上げた母のイメージは彼に永くつきまとい、後に作家となつてからも、彼の描く女性の少なからざる部分を占める様になつたのである。長ずるに及び、新聞事業に失敗して、父の遺産を蕩盡したサッカレーは畫の修業の爲にパリにおもむいた

が、そこでイサベラ・ショウなる女性と戀に落ち入り、これと結婚し、三兒をあげたにも拘わらず、妻イサベラは一八四〇年頃から精神に異常を來して病院に入り、妻としての役目を果せなくなつた。この頃からの數年と云うものは、サッカレーの生涯に於ける暗黒時代とも云うべきものであつて、志した畫の修業ものにはならず、男やめ同然の身で二人の幼い娘を育て、*Fraser's Magazine* の御傭いの寄稿家として、僅かに糊口をつなぎ得はしたものの、全くの penny-a-liner としての不遇の日々を送つて居たのであつた。サッカレーは自分の不幸な結婚を顧みて、或る時は我と我身の不幸を嘆いた事もあつたであらうし、又或る時は、この様な結果に導く結婚を敢えてした、自分の愚かさを嘲笑もしたであらう。然し彼の結婚生活がこの様な不幸な結果をもたらしたとは云え、否もたらしたが故にこそ、彼の女性思慕の念はつて行つたのである。女性なるものは全く詰らぬもので、丈夫たるものに災いをこそもたらせ、決して幸福などを與えるものではないと彼の *Satirical Monitor* は囁くけれども、この囁きに同意するには、彼の畫いていた憧憬の念、彼の拂つた犠牲は大きすぎたのであつた。そして彼は自分の心にある二つの理想の女性の姿、即ち十歳の子供が遠くインドにある母を思つてあこがれた母性的なやさしさと自分の戀人であり妻である女性にあると信じた戀人的な甘さ、やさしさを兼ねそなえた女性を實世間に發見し、或いは又これを自分の作品の中に創造しようと遍歴の旅に出で立つたのである。

そして、サッカレーが先ず創り上げたのは、*Vanity Fair* の *Amelia* なる女性であつた。サッカレーはブルックフィールド夫人に對して、一

八五三年に、

I can't live without the tenderness of some woman, and expect when I am sixty I shall be marrying a girl of eleven or twelve innocent, barley-sugar-loving, in a pinafore.<sup>②</sup>

と云つてゐる様に、所謂「可憐な少女」が好みに合つていたらしい。それに *Vanity Fair* に於て *Amelia* の敵役となる *Rebecca Sharp* は八歳から一足とびに、一人前の女になつてしまつた様な女であつた。サッカレーはレベッカを描寫して、

She never had been a girl; she had been a woman since she was eight years old.<sup>③</sup>

と云つて居るが、この“never had been a girl”と云う所で、サッカレーはレベッカと云う女性を、はつきりと描き出したのであつた。と云うのは、サッカレーにとつては少くとも、*girlish* でない若い女と云うものは、とりもなおさず、悪い女であるとする事は決定的な事であつた。それ故、あらゆるものを武器に利用して、社交界での活動を目論む、*Coquetry* に富んだこのレベッカと對照の位置にある、所謂善玉の女性 *Amelia* は、愛される事と愛する事を人生の最大の幸福と考え、情に溺れ易い、そして又センチメンタルな夢を見勝ちの“nice, simple, girlish girl”であつた。この様にしてアミーリアとレベッカの二人、即ち Love と *Worldiness* の對立によつて、*Vanity Fair* の物語は運ばれて行くが、サッカレーがブルックフィールド夫人にあてて、一八四八年六月に

You know you are only a piece of Amelia, my mother is another half, my poor little wife y est four beauxoup...<sup>④</sup>

ヘンリー・エズモンドの成立

と云つてゐる様に、ここまではアミーリアは、サッカレーの不幸な妻イサベラをモデルとしたものと考えてもよいであらう。然し、話が進むにつれて間もなく、ドビン少佐の出現によつて、アミーリアとドビンの戀物語が挿入され、アミーリアは夫ジョージがウォーターローの戦で戦死したので、未亡人となり、夫に満されなかつた愛を、その子供に向け始める。この所あたりより、サッカレーがアミーリアの性格について、ブルックフィールド夫人に述べた第二の要素、即ちサッカレーの母が大きく現われ始め、妻イサベラのイメージは去つて、母カーマイケル・スミス夫人の姿が前面に押し出されるのである。

サッカレーの理想とした女性とは、“a nice, simple, girlish girl”であると共に、それを戀する男に、母の乳房に抱かれた子供が感じる様な、大きな安心感に満ちた抱擁を與えて呉れると云う女性であり、相手の男性にとつて、一方に於ては、その男に保護を求めて来る弱い存在であると共に、他方に於ては、世の争いに疲れ傷ついた男性をやさしく抱いて呉れると云う。男性に對して被保護者であると同時に保護者でもある二つの性格を兼ねそなえた女性であつた。

所がこのアミーリアの中には、この二つの要素はあるにはあつたが、それ等はそれぞれ別々の人間に向けられていた。即ちアミーリアはドビンにとつては理想の戀人でありはしたものの、もう一つの母性的な愛情と云うものは、その子ジョージのみ向けられていて、アミーリアの中にはドビンとは全く關係のない母親としての性格が大きな役割を占めていた。その爲サッカレーは *Vanity Fair* の後半の物語を進めるにあつて、全然關係のない、三つの部分、即ちドビンのアミーリアに對する

戀、アミリーアの息子ジョージに對する母としての愛、更にもう一つレベッカの社交界に於ける冒險に自分の力を割かなければならなかつた。サッカレーはこの様に話の筋のうまく運ばないのを何とかする爲に、*Vanity Fair* 全卷六十七章ある中の第六十二章になつて、それ迄全然姿を出さなかつた、物語の語り手を、“I”と云う主格で登場させて、プロットの混亂の修正を計り、又アミリーアの世界が、レベッカの活動する世界と完全にはなれたものになつてしまい、二人の間のコントラストがうまく行かない様になつてしまつたのを補強する意味で、レベッカの世界にアミリーアの代役たる *Lady Jane* を登場させたのである。サッカレーはこの *Lady Jane* なる人物を、その登場した最初に於ては、明らかに輕蔑を以て、書いていたものの、彼女をしてアミリーアの代役たらしめる必要を感じたとき以來、態度を變え、*Lady Jane* を同情的に眺めると云う豹變を敢えてしている。然し作者の側に於けるこの様な努力にも拘わらず、*Vanity Fair* の失なわれた統一は回復されなかつた。それはとりもなおさず、作者がその女主人公に投入しようとした二つの性格が、二つながらに統一的に、作者自身の投影である人物に對して働かなかつた事に原因するのである。それ故次の *History of Arthur Pendennis* に於ては、サッカレーは、この二つの要素を一人の女性に求める事を止め、一轉して母の様な優しさを母そのものに、そして *Girlish Girl* の理想を主人公の戀人にと、それぞれ別個の人物にこの二つの要素を求めたのである。

すでに述べた様に、女主人公アミリーアの中に投入された、母性的な優しさと、戀人としての可憐さの二つの中の一つは、作者自身の投影で

ある戀人ドビンとは全然無關係であつたのに反し、この *History of Arthur Pendennis* に於ては、この二つがヘレンとローラの二人の人間に分離され、この二人は作者の投影である *Arthur Pendennis* に對して、それぞれ母親と戀人の役を演じているのであつて、その限りに於ては *Vanity Fair* よりはつきりとした構成を持つたものと云えるであらう。然しこの様に自分が理想とした女性の二つの性格をはつきり二つに分離し、それを二人の人間にそれぞれ代表させると云うことだけに、サッカレーは満足して止まる事が出来なかつた。彼はあくまで彼自身の作中に於ける投影である主人公に對して、この二つの性格を一身に兼ねそなえた理想の女性を創造しようと努めたのであり、その結果現われたものが *History of Henry Esmond* であつた。

この *History of Henry Esmond* に於ては、今迄ペンデンスに於てヘレンとローラとにそれぞれ分たれて賦與されていた、母性的な性格と戀人としての優しさを一身に兼ねそなえ、しかもそれは *Vanity Fair* に於けるが如くに、その一方が作者の投影たる人物に全然無關係に活動する事もなく、終始主人公ヘンリー・エズモンドに對して、カースルウッド夫人レーチェルの姿で統一的に働きかけていた。このレーチェルな女性性は始めはヘンリー・エズモンドに對して母の様な立場に立つて居り、そして殆んど目につかぬ位に徐々に母親の様な關係から、戀人のそれへと移行して行きながらも、なお母性的性格を失なわずに、サッカレーの理想の女性として、全篇にわたつて行動するのである。

若し *Vanity Fair*, *Pendennis*, *Henry Esmond* の三つの作品を、サッカレーの女性理想化の経過として見る事が許されるならば、その結論

は大體次の様なものとなると云つてもいいかと思われる。即ち *Vanity Fair* に於けるアミリーアの母親としての性格は何度も云う様に、その子ジョージに對してのみ働きかけるものであつて、作者自身の投影であるドビン少佐には、母親としてのアミリーアは無關係であつた。と云うことは又とりもなおさず、作者の側に於て理想とする母性的性格と戀人の女らしさを描くにあたつて、未だこれを融合統一させたものを作り出し得る程には、女性を理想化する事が出来なかつたと云う事を意味する。そして一度 *Vanity Fair* に於て、この融合統一の企てに失敗したために、彼は次の試みとして、これらを別々の人間に姿を借りて述べては見たものの、*Vanity Fair* の結果を混亂と呼ぶならば、ペンデニスに於て得られた成果は、混亂したものを單に分離した丈のことであつて、決してそれは統一融合と云い得る所のものではなかつたのである。これに對してレーテルの場合六歳のよるべもない孤獨なヘンリー・エズモンドが、その陽光にきらめく金髪を見て、“Dea Certe!” と叫んだ最初より、彼女はエズモンドに對して母であり、又女神の如く美しい、又優しい女性であつたのであり、サッカレーは *History of Henry Esmond* に至つて始めて、自分の理想とする女性の創造を完成し得たと云つてもよいであらう。

それでは一體このヘンリー・エズモンドの物語なる小説は如何なる経過を経て創造されたものであらうか。

ハーヴァード大學レイ教授編纂にかかる、*The Letters and Private Papers of William Makepeace Thackeray, A vols. Harvard University Press. 1946.* なるほん完全な書翰集の公にされた今日に於て、

ヘンリー・エズモンドの成立

我々はサッカレーの生活に關して多くの興味あるディテールを伺ひ知り得るのである。

以下に於てこの書翰集の中に見出す事の出来る二三の事實よりしてヘンリー・エズモンドの物語の成立の経過を考えあわせてその物語の一つの解釋を試みて見た。

先づ第一にヘンリー・エズモンドの書かれた時期についてであるが、サッカレーは、一八五〇年十一月に母カーマイケル・ミス夫人宛の手紙の中で

「今迄考へつゝいたものよりずっと良い小説の題材が見つかった。」<sup>⑥</sup>

と述べて居り、續いて翌年の一月に同じく母に宛て、

「そして又或る物語が私の心の中に沸騰してゐます。その物語の中にはとても善良で高貴な寛大な心を持つた人物が數人現はれます。一人も悪人の居ない物語も又いゝものではないでせうか。」<sup>⑦</sup>

と云つて居る所よりしても、大體に於てこの頃即ち一八五〇年の暮から一八五一年の始にかけて、エズモンドの構想が練られたと云う事が云えると思う。サッカレーは當時一八五〇年の十一月に半自叙傳的小説ペンデニスを完結し、すぐに續いて十八世紀の文學者の評傳であるイングリッシュ・ヒュモリスツの講演の爲の準備を始めて居り、やはり母に宛てた手紙の中で、

「私は此の何週間か終日前世紀の中で暮してゐますので、殆んど今の世紀と同じ程に、前世紀に親しくなつた様に思える程です。オクスフォードやボリングブルックもテッセルやバーマーストンと同じ位いや寧ろそれ以上に興味があります。」<sup>⑧</sup>

と云つて居る様に、完全に十八世紀の世界にひたり切つて居たと思え

る。ヘンリー・エズモンドの物語が、十八世紀を舞臺に十八世紀の文體で書かれたと云うのはこの十八世紀への興味が第一の原因であつた事は容易に想像される事である。そして大體一八五一年の九月十日の頃にエズモンドは着手されたりしく、翌一八五二年の五月に完成された。

然しこの一八五一年の九月より一八五二年五月の間に、サッカレーの生涯を劃すべき大事件が起つたのであつた。サッカレーはエズモンドを書いてゐる最中にやはり母に宛て、

「この小説は、分冊にして出すには、ちよつと眞面目すぎ陰氣すぎますし、又挿話も充分ではありません。貴方は多分この物語には感心なさいませんでせう。この物語は思つて見たくもない程ひどい悲しみと苦痛の時期に書かれたのです。」と云つてゐるが、このエズモンドの生れる直接の原因となつた「悲しみと苦痛」をサッカレーに與えたものは彼とブルックフィールド夫人との間の戀愛の破滅であつた。

これより前サッカレーがケンブリッジの學窓に學んだときの友人の一人に、ウィリアム・ブルックフィールドなる人があつた。ブルックフィールドはシェフィールドの辯護士の次男として生れたが、生れつきの美貌と明るい性格で、大學時代には友人のうけもよく、貴族の子弟とも交はり、當時のケンブリッジに於ける fashionable な存在として目立つて居り、サッカレー、デニソン、アーサー・ハラム等と交友關係も深かつた。そして又ケンブリッジ卒業後の振り出しも中々幸運で、前途に洋々たるものを思わせていたが、その頃 *Jane Octavia Elton* なるパロネットの娘と知り合い、これと一八四一年に結婚した。ブルックフィールドは聖職について、將來はビショップたらんと野心を抱いて居り、妻ジェインも又、夫の榮進をあてにして居たものの様に思われるが、その後

暫らくして夫の出世のはかばかしくないのに彼女は失望し、夫の方も又妻に色々と不満を抱く様になり、二人の間柄はますますくなくなり、夫婦仲は疎遠なものになつて行つた。サッカレーはこのブルックフィールド夫人と一八四二年に始めて會つて居るが、書翰集の中に於てはこの二人の最初の出合いが如何なるものであつたかを知るよすがもない。然しサッカレーのこの女性に對する親愛の念は直ぐに起つて來たものの様である。その後夫妻と親しく交つてゐる中に、サッカレーは、丁度少年エズモンドがカースルウッド子爵夫妻の愛情の變遷を見つめていた様に、この夫婦の間の愛情の推移をつぶさに見てとつていた。すでに一八四〇年にサッカレーの妻イサベラは發狂していたが、サッカレーは一八四五年頃迄は未だに自分の妻の健康回復を諦めてはいなかつた。然しその後漸く、その不可能なる事を知ると共に、彼のブルックフィールド夫人に對する憧れの氣持は強まつて行き、彼女に自分を慰め、又自分を支え、自分に同情して呉れる女性を求めたのである。此の頃には、サッカレーは未だに一介の三文文士にすぎず、ブルックフィールド夫人の目にも、單に夫ウィリアムの友人としてしかうつて居なかつた。所が一八四八年に、*Vanity Fair* の成功と共にサッカレーは一躍流行作家の位置に躍り上り、ブルックフィールド夫人は、自分のサッカレー評價を變更せざるを得なくなり、二人の氣持はやがて互に通い合う様になつて來た。

そして一八四八年にサッカレーは招かれてブルックフィールド夫人の生家の *Clevedon Court* を訪れ、ここに於て二人はお互の不幸、満たされざる生活について語り合い意氣投合したものの様に思われる。サッカレーはその年の十一月にブルックフィールド夫人に對して



「私は此間の四五日間の事を考へてゐます。あれ程幸福だった時もありますまい。そしてこれからずつと一生の間、あのなつかしい *Cherison* を愛するつもりで居ります。」

と云つてゐるが、この時以來彼は手紙の中でブルックフィールド夫人に對して呼び掛ける時に以前の様に *madame* とか *friend* と云う言葉を用ゐずに *my dear Lady* 或は *my sister* と云う様に呼んでゐる。

この様にして二人の間の氣持は段々と育つて行つたが、夫ウィリアムも又サッカレーが自分の妻に對して特別の氣持を持つて居る事を知りながら、慰め手のない生活を送る友人への同情と云う氣持からか、或いは又ロンドンの流行作家から愛情を寄せられる女性を妻として持つてゐると云う自惚からか、何れにせよこの二人の特殊な關係を默認して居た。又一方サッカレーもブルックフィールドに對して自分のブルックフィールド夫人への愛を告白して、

「その氣持は決して危険なものではありません。云はゞ一種の藝術的な喜び、或ひは精神的な悦樂とも云ふべきものであり、他の自然の事物——子供とか風景とか、色の調和、音樂などと云つたもの——が私に感動を與へると同じ様なものです。」

と云つて、その愛は純粹な精神的な愛情であると、彼に誓うのである。

この二人の關係が、本當にサッカレーが彼女の夫に向つて誓つた様に、純粹に精神的な愛情であつたかどうかは、甚だ疑わしく、行動の上では、サッカレーはブルックフィールドに云つた以上に出る様なことはなかつたと推定されるとしても、氣持の上では、サッカレーが自分とブルックフィールド夫人との關係の *confidant* の役をつとめたベリー姉妹に向つて、

「何度も何度も私の友達（その男は畫では角が生えて、尻尾をつけた様に描かれてゐますが）が私に囁きかけます。「おい君、こんなに懂れたり、待ちくたびれたり、失望したりしたつて、一體何の役に立つんだらう。それにあんな心を噛む様な悲しみを味ひ、毎日毎晩の様に物思ひにふけた所で……二つ三つ嘘をついてやれば萬事うまく行くんじゃないか。世間の人がそんなにこせこせしてと思ふのかい。」しかしその時に四人の子供が、惡魔と私の間に、その無邪氣な姿を現はします。それで哀れな惡魔は尻尾をまいて退散します。」

と云つてゐる様に、サッカレーのブルックフィールド夫人に對して持つてゐたものは、決して純粹に精神的な愛情のみではなかつた。唯彼は自分の娘たち、又ブルックフィールドの子供たちに對する義務觀念に縛られて、所謂不純な邪念と云うものを押し殺して居た丈の事であつた。

一方は男ヤモメ同然の流行作家、一方は相當虛榮心の強い女で、飽きの來た夫婦生活の徒然を慰めるために、戀愛遊戲を求める美貌の有閑婦人——現代に於ては事態は至極簡單に片附けられて、新聞の片隅のゴシップの賑わすばかりであるが、この場合場所は英國、時代は所謂 *Victorian* *respectability* の支配するヴィクトリア朝であつたために事は込み入つて来る。發狂したりとは云えイサベラはサッカレーの歴とした妻であり、又ブルックフィールド夫人は聖職者を夫として持つて居り、二人は結婚出來る様な立場には決して居なかつた。それ故に若しこの二人がお互の關係を續けようとするならば、二人の間の愛情と云うものに殘された道は唯頭へ上つて、所謂精神的な愛、プラトニックラヴと云うものに變化する道だけなのである。

「私達は地上に於て許される限りお互に愛し合ふし、又死後天國に於てもさう致しませう。——若し貴方が先に行かれるなら、私の爲に天國で跪いて祈り、

私を天國に引き上げて下さるでせう。——若し私が先なら、私の後に貴方の愛が生き残り、常にやさしく私の記憶に祝福を興へてゐて下さつてゐると云ふ事を思ひ出すのが、私が天國で考へる事の中の最高のものである事を御誓ひ致します。私は貴方の心の中に生きて居るのですから、完全に亡びてしまふと云ふ事はありません。その事はそれ自身に於て云はゞ天國の保證を得た様なものなのです。」

かくして時は過ぎて行つたが、この様な夫の黙認の下に於ける妻の戀愛と云う様な不自然な關係は、よしんばその愛が所謂精神的なもののみであつたにしても永續しないのが物の道理であり、一八五一年の九月にサッカレーは *Mrs. Elliot* と *Kate Perry* の二人に宛て、

「事は終りました。そして仲違ひはもう手のつけようありません。ムッシュウは男らしく、自分の思つて居る事をはつきり云ひました。もうこれ以上何も云う事も、する事ありません。」

と云つて居る様に、二人の關係は破局に到達したのであるが、丁度この頃がサッカレーがエズモンドに手をつけ始めた時期であつた。成程嚴密に考えるとき、エズモンドの構想が、サッカレーの頭の中に練られたのは、一八五〇年の暮から翌年の始めにかけてであり、その頃は未だ、サッカレーとブルックフィールド夫人の關係は、表面的には安らかであつて、二人の關係の破滅したのは、一八五一年の夏頃であつた。それ故エズモンドの物語とサッカレーとブルックフィールド夫人との戀愛の二つのものの間の相關關係は、前者の構想が後者の破局に到達する以前に完成されていた故に、一應は存在しないものとも考えられるが、エズモンド執筆の時期がこの破局のもたらした風の時期にあたつてゐる所よりしても、そして又サッカレーの、自分の經驗、自分の感情をそのまま作品

の中に投影させると云うエゴテイスティックな作風よりしても、作者の日々の氣持の動搖が、その日その日に書き上げて行つたものに、影響を及すと云う事は明白な事である。そして又エズモンドの物語が演ぜられ、主人公ヘンリー・エズモンドが限らない愛情を寄せていた、カースルウッド・ホールは、そこでサッカレーが始めてブルックフィールド夫人に自分の心を打ち明け、又彼女の方からも、自分の氣持をサッカレーに知らせたクリーヴドン・コートモデルにしている所よりしても、エズモンドの物語の構成に關して、如何にこのブルックフィールド夫人なる女性が大きな役割を果したかと云う事の大體の概念は得られるのである。

この戀愛の破綻直後のサッカレーの氣持は複雑であつて、ブルックフィールド夫人が彼より去つて行つたのは、夫がある女性として、又子供の母としての彼女の當然の行動であると考え、我身の不幸を嘆きながら、「青い目や圓い顔をみかけると、私はそれを悲し氣にみつめます。背の高い黒衣の女に出合ふと目まひを感じます。ですが私には、やらねばならない仕事があります。——昨晚私は貴方の事を考へて長い間眠れませんでした。そして今晩も又そうするでせうが、どうか貴方が幸福である様に考へられたらと願つて居ります。」

と袂別の後もひそかにブルックフィールド夫人ととり交わした手紙の中に、彼女への思慕の情をよせる一方に於て、サッカレーは *Kate Perry* に宛て、

「私は彼女を愛さねばよかつたと思つてゐます。私は女に弄ばれて、その夫、その主人の命ずるままに放り出されたのです。——以上の事が私の感じてゐる事なのです。私は昨日貴方達の手紙を片付けていましたが泣きたくなる所か、さうなるだらうと思つてゐた通り笑ひ出しました。こんなものに私は自分の心を捧げてゐたのです。」サッカレーさん、何時御越し下さいますか。」

とか「主人のウィリアムもとても喜びます事でせう。」とか「お歸りになった後で、これこれしかじかの事をすっかり忘れてゐたのを思ひ出しました。」とか。その癖後でブルックフィールドから一言云はれると、云ふに事を缺いて「私は主人を唯單に妻としてと云ふ立場からだけでなく、本當の愛情で以て主人を尊敬し、崇め、愛します。」てな風です。誠にしかあれかしと祈るばかりですが、自分が馬鹿にされたと云ふ考へが何よりも一番辛い事です。」

と云つてゐる様に、彼の心には自分の彼女に捧げた愛情が報いられず、結局の所自分が彼女に弄ばれたのではないか、彼女は本當に自分を愛してはいなかつたのではないかと云う強い疑いの念が残つていた。

以上に述べた様にサッカレーは、ブルックフィールド夫人との關係の終つた後に一方に於ては、彼女の行爲を是認し、一時は世間的な慣習、拘束のために別れる事はあつても、彼女は未だに彼を愛して居り、二人の愛情は純粹にして永遠なるものであり、天國に於て結ばれるものであると云う様に考えながらも、他方には自分が馬鹿にされた、弄ばれたと云う氣持を禁じ得なかつたのであるが、最初の中は後者の弄ばれたと云う方の氣持が相當に支配的であつた。サッカレーの心の中には彼がブルックフィールド夫人に對して抱いた愛こそ眞實の愛であり、永遠のものであると云う氣持に對して、その愛もはかないものであり、自分は相手の女に偽られ裏切られたのだと云う氣持とが相争つていたが、然し結局サッカレーは自分とブルックフィールド夫人との間の愛が偽りのものであると云う事を肯定する事が出来なかつた。

サッカレーは彼の母にブルックフィールド夫人は自分の *Beau-ideal* であるとしてゐるが、實にこのブルックフィールド夫人こそ、それ迄のサッカレーの作品の中で彼が全くのシニズムに落入るのを防ぎ止めて

ヘンリー・エズモンドの成立

いた所謂善玉の女性のモデルなのであつて、海の中につかる様にその中にひたり切れる女心、俗世の營みに傷いた男の心をやさしく抱擁して呉れる理想の女心、永遠に女性的なるものの生れ出る泉となり、サッカレーにそれを感じさせて呉れたブルックフィールド夫人に對する自分の憧憬を否定してしまう事は、要するに今迄に自分が *Vanity Fair* の *America Pendennis* の *Helen* と *Laura* と引き續き創造して來た一連の理想の女性を求める努力を否定し、ひいては彼が *English Humourists* の中でけなしつけた本當に何等の救いのないスウィフト的な全くの虚無的な世界に落ち込んでしまふ事になるのである。それ故にサッカレーは自分がブルックフィールド夫人に對して持つ愛情こそ、あらゆるものに打ち克つ決して死ぬ事のない愛である事を自分に信じこませねばならなかつた。彼は

「若し私がこんな氣持で私の本を書いて行つたなら、とても刻薄なものが出来るでせう。昨日少し書いて見ましたが、全く惡魔的なもので、おそろしくなる程陽氣なものが荒れ狂つて居ます。」

と云つてゐるが、これこそ正に上に述べた二つの氣持の相闘つてゐる時期であつたと思われる。その後暫らくしてサッカレーは母に宛て、

「物語はうまい工合に即ち愉快に進んでゐます。一月前に書いたものは、ぞつとする程陰鬱です。しかし或る苦しみの痛手がなくなつた今ではもつとうまく書けるでせう。實際の所私は相當苦しい時を過しましたが當時の事を振りかへつて見る迄、どんなに私自身が悲慘だつたか判りませんでした。」

と云つてゐる所よりしても、纏てはその相矛盾する氣持も整理され、サッカレーは自分のエモーションを克服する事が出来たらしい。

今若し此處に於て、ヘンリー・エズモンドに於けるカースルウッド夫

人がサッカーの信じようとして居た愛を代表し、ベアトリックスがサッカーの抱く所の裏切られた、偽られたと云う氣持を象徴するものと考えざる事が許されるならば、カースルウッド夫人へ愛を捧げながらも、ベアトリックスの美貌に眩惑されて苦しい戀を味わつた後にふたゝびその戀の惡夢から醒め果てて、理想の女性カースルウッド夫人の許へ歸つて行くと云うエズモンドの物語は、結局の所ブルックフィールド夫人への戀の破綻した後のサッカーの心の中に於ける相剋——即ち一方に於てなおもブルックフィールド夫人を愛しながらも、他方に於ては彼女に偽はられたと云う恨みにも似た氣持を捨て切れないと云つた相矛盾した氣持の相剋の物語であり、そして又一時はその恨みの氣持が支配的であつた様に見えても、臆ては愛があらゆるものに打ち克つて行くと云う愛の勝利、愛の理想化の物語であると解釋される事も可能であると思われる。

エズモンドの物語の筋は、薄命の子ヘンリー・エズモンドのレーチェル、ベアトリックス母娘二人への戀の物語を中心とし、その背景として、十八世紀の政治戦争文人の社會の華やかにして眞に迫る描寫があり、エズモンドのベアトリックスに對する戀をより白熱したものにするために、エズモンドの彼女に拂つた犠牲即ちカースルウッド家の嫡男でありながらその爵位に對する權利を放棄する事にまつわる、カースルウッド家の歴史の敘述等、秀れた構成で物語は語り進められて行くが、結局の所どうしてサッカーはエズモンドをしてベアトリックスへの戀が破滅したのちに、その母カースルウッド夫人レーチェルと結婚させたかと云う所に、エズモンドが公にされて以來の問題があつた様に思われる。

ヘンリー・エズモンドが出版された直後に、タイムズは主要次の如き批評をこれに對して下している。即ちその批評家は第一にサッカーの作品を一般的に論じ、彼の小説にはシニカルであり、陰鬱な、讀者の氣を滅入らせる様なものと攻撃し、次いで歴史小説と云うものはジャンルとして價值のないものであつて、特技が當世の風習を描寫する事にあるサッカーが過去を再現しようとする事は適當でないとし、最後にその小説の情緒的な構成に言及して、始めの部分を通じて息子様な立場に居たヘンリーをカースルウッド夫人と結婚させるべきでないと論じているのである。

ヘンリーは物語のほぼ半分迄、レーチェルに對して思慕の念を抱き、そして又スペイン遠征の後に歸國してレーチェルとラヴ・シーンを演じて求婚までもしていながら、その直後にベアトリックスの美貌にひかれてしまふ。そして又一方に於てレーチェルへの愛が *filial* なものであると云いながらも、ベアトリックスへの生命がけの戀に敗れたすぐあとでレーチェルと結婚してしまふと云うのは道德觀念の極めて嚴格であり、通讀した丈で急いで批評を下さねばならなかつた當時の批評家の逆鱗に觸れるのは當然の事であつた。上述したタイムズの批評も當時の趣味と云うものをよく語つて居り、この批評のおかげでエズモンドの賣行が全く止つてしまつたと云うのも又興味ある事であるが、このレーチェルとベアトリックスの二人は決して全く別個な二人の人間を示すものではなく、一人の人間に對するサッカーの抱いた二つの矛盾した氣持を表象するものである。

以上に於て大體ヘンリー・エズモンドの成立の經過を述べたが、以下

レーチェル、ベアトリックスの二人に對する主人公ヘンリー・エズモンドの愛が如何なる消長をその物語の中で辿るかを考えて見たいと思う。先づ物語の冒頭に於て、先代カースルウッド子爵の庶子として、その廣い邸宅に唯一人、先代の従弟にあたる新しい子爵夫妻の到着するのを淋しく待つて居る孤兒ヘンリー・エズモンドの前にカースルウッド夫人は金髪を日に輝かせて、「まさしく女神の如く」に現われ、エズモンドは夫人を見て、次の様に感じる。

「この佳人の眼差しや身振りの一つ一つに天使の様な柔和さと明るい同情とがある様であつた。動いてゐても、靜止してゐても、彼女は同じ様に淑やかに見えた。彼女の云ふ言葉がどんなに些細なものであつても、彼女の聲の調子は殆んど胸の痛くなる様な快さを與へた。殆んど奉公人に變らぬ十二歳の少年が御主人たる高貴の婦人に對して寄せた感情は戀とは呼べない。それは崇拜であつた。彼女の目の色を捉へる事、彼女の用を豫測して彼女が云はぬ中にそれを果す事、彼女を見守り後を追ひ崇める事が、彼の生活の仕事となつた。」

その頃から、カースルウッド子爵夫妻の間柄はもう新婚の夢も消え果てて、お互に相手の缺點が鼻につき始め、彼等の愛情も

「結婚生活によくある今一つの段階——女の方で蜜月の神がもはや神でなく、みんなと變らぬ平凡な人間である事を知り、わが心の中を覗いて「おお、虚しき席と空の祠」を見出す時期」

に達したのであるが、丁度この頃エズモンドの不注意から、レーチェルはエズモンドと共に天然痘に感染し、危く生命は助かつたが、その容色はやゝ衰え、その爲益々夫婦の間は疎遠になつて行く。エズモンドは自分の不注意が更に又主人夫婦の間の疎遠の原因となつた事について惱みながら、何とかしてレーチェルを幸福にする爲に役立とうと努力する。

「エズモンド夫人に對する彼の愛着は感謝に満ちた尊敬の極めて強い熱情であつたから彼女に一つの悲しみでも除いてやり、一つの用事でもしてやる爲に、毎日生命を投出してもよかつた。そしてまさしくこの尊敬の深さと強さによつて、自分の景仰する貴婦人の生活が非常に不幸なものであり、或る祕密の心配——彼女は決して自分の不安を人に話さなかつた——が彼女を壓へつけてゐる事を推量し始めた。」

そして何年かの後エズモンドはカースルウッド夫人の好意により、ケンブリッジに入學する事が出来、そこで將來聖職につくべく勉學するのであるが、カースルウッド子爵は、勝負事のいざこざから、モーハン卿なる無賴貴族の手にかかつて倒れ、エズモンドも又この決闘に關係した所からケンブリッジより卒業を前にして追放され、牢獄につながられる身となり、又その爲カースルウッド子爵夫人の怒りを蒙り、疎遠の仲となる。エズモンドは、この愛する夫人より遠ざけられた苦しみを、丁度若いインディアンが部族の戦士の列に加わる前に、黙々と苦業を耐え忍ぶ様に、人生に入る前の入門式と考えて耐え忍び、その後軍務に服して、スペインに遠征し、本國に歸還した際にカースルウッド夫人の結婚の噂を聞き、慌て、カースルウッドを訪れ、そこで二人の間に始めて思いが通うのである。そしてエズモンドは、

「おお み恵み深い神よ、友なく力なき人間に過ぎない自分にかような愛の注がれるとは、一體自分は何であらうか。この様な寶を與へられたからには、自分が今日迄生きて來たのも決して無駄ではなかつた。——若し無駄などと思ふならば、感謝を知らぬ無情な人非人であらう。この寶に比べれば、野心など利己的な虚榮に過ぎない。金持になり有名になるつて？ 今から一年して他の名がお前の名より高く響き渡るときまたお前が徒らに様々の稱號を棺桶に彫られて、淋しく地下に横たわつてゐるとき、そんなことが何の役に立とうか。たゞ

眞の愛のみはお前の亡き後にも生き、ひそかな祝福を以てお前の靈を追ひ、あるひはお前に先行し、お前のためにとりなす。たとへ死んでも一二の優しい人の胸に生きてゐるなら、「われ悉くは死せじ」であり、もし聖徒になつて、昇天した靈がなほ私を愛し、私のために祈つて呉れるなら、私は決して救ひなく望みなき人間ではないのだ。」

と愛の讃歌を唱へるが、こゝで終つてはエズモンドの物語も單なる普通の戀物語にすぎないし、こゝ迄の所はサッカレーのブルックフィールド夫人に對する關係と全く同じものであり、背景とかエピソードとかに或程度のフィクションが加えられてあつても結局の所はその歴史的な記述にすぎないものであるが、サッカレーは、ブルックフィールド夫人との關係が破綻した後に於ても尙自分の彼女に對して持つてゐるものが最高の愛である事を信じようとし、その愛の將來、その愛がすべてのものに打ち克つ迄の發展、その愛の淨化結晶の道程を文學的に實踐しようと試みたのであつて、自分の持つ愛が最高のもの、あらゆるものを克服して永遠のものであり又眞實のものである爲には、先づ第一に彼女との關係の破綻に際して生れて來た所の裏切られたと云う氣持を克服しなければならなかつた。かくしてヘンリー・エズモンドの物語に於ても、エズモンドの戀人カースウッド夫人レーチェルは、ブルックフィールド夫人と同じ様に、自分の家庭上の義務を盾にとつて、エズモンドのなした求婚を拒絶するのである。

この様にして、その後エズモンドの愛が、試練をうくべき煉獄としてのベアトリックスなる女性が登場する。さてこのベアトリックスと云う女性は、虚榮の市のレベッカ、ペンデニスのブランシュと同じ系列に屬し、アミーリア、ローラ等の善玉の女性と對照の位置を占めてゐる。元

來サッカレーの作品は一人の男性（これはすべての場合作者自身の姿の作中への投影であるが）を中心として、その周圍に二人の女性を配し、この二人の女性（一人は善玉であり、他の一人は惡玉である。）の兩方に惹かれて悩む、男の心を描くと云う殆んど同様の構成を有してゐる。

然し善玉と云い、惡玉と云う場合、これらの言葉は普通の場合、單純な勸善懲惡の意味に於て連想されるのであるが、サッカレーの場合は決してその様な單純なものではなかつた。彼に於ては、善玉の女性は、サッカレーが此の世の *Vanity Fair* に於て、*Vain* ならざるものとして強調する、*Motherly Love* と *Woman's Purity* とを代表して居るもの、それらの女性は、何かしら冷い輕蔑の様なもので以て描かれてゐるのを、云わず語らずの中に讀者に感じさせるのである。そして又一方、もう一つのタイプ即ち惡玉の女性は爵位に憧れ、富と榮譽を求める世間の虚榮心を諷刺すると同時に、又前の善玉の女性の貞淑さを擲擻する様な、兩刃の劍の如き役をなしているものと云えよう。

元來サッカレーは女性の純潔・美德と云うものを重要視していたが、このことはサッカレーが女と云うものは、頭の頂きから足の先まで、*pure* なものであると、アプリアー的に考へていたと云う事を意味するものではない。それよりも寧ろ、そう考へねばならない時代から要請され、又彼自身もそう努力して居た結果であると考へた方が當を得てゐるのではあるまいか。我々がそれぞれの作品に於ける對立せる二人の女主人公の性格を考え合はせるとき、サッカレーの執拗な迄の強調にも拘わらず、ヴィヴィッドな印象を以て我々に迫つて來るのは、*pure* な女性アミーリア等ではなく、どう見ても *pure* とは云いかねるレベッカ

の系統に屬する女性なのである。このことは、我々二十世紀の讀者が月並な女性の純潔などと云うものに興味を持ち得ないことによるとして、それは又とりもなおさずサッカレー自身の心の中心にも pure ならざる女性のイメージが相當に強く存在した事を意味するのであり、我々はこゝにサッカレーの中にひそむものは、レベッカの系統に屬する女性を欲して居た事を知り得るのである。サッカレーは *Kosova and Rebecca* に於て述べている様に、貞節な女の退屈さをよく知つていた。

美德・純潔・貞節なるものはヴィクトリア朝に於ては絶對的な價値のあるものとして刻印づけられていたけれども、その實體はごくあいまいなものであり、この様なものを第一義のものとして生きて行く女性のつまらなさを彼は夙に見抜いていた。それ故にこそ、サッカレーは、レベッカ、ブランシュに sensual な temperament を與え、女性のその様なものにひかれて行く男性の生活の一面を描こうとした。

サッカレーはこの様なことを意圖した點に於て十九世紀を超えて居た、或いは見方によつては、十八世紀を懷古して居たとも云えるが、少くとも十九世紀の人間ではなかつた。然しそれと同時に彼はやはり、彼の時代の束縛をすべて超越出来る巨人ではなかつた。その爲に *David Cecil* が云う様に、サッカレーは自分の創造した、所謂 *bad women* に fiery sensual temperament を與えながらも、これを充分に發展させる事は出来なかつたのであり、それと同じ様な事はペンデニスに於ける彼の態度にも見られる事である。即ち彼はペンデニスの序文に於て、自分はフィールディングにならつて、男 (MAN) と大文字を使つて書いているが ( ) の生活を完全に描こうとして居ると述べながらも、主人公アーサー

と下宿の門番の娘ファニーとの間の關係を述べるにあたつて、言葉を濁さざるを得なかつた。そしてこのことを敢えて云うならば、サッカレーに於ける十九世紀的限界とも云い得ることなのであらう。

所でこのベアトリックスなる女性も又、この一統に屬する女性であつて、前述の裏切られたと云う恨みにも似た氣持と更に彼女に對しての所謂精神的ならざる肉の望みと云つた、サッカレーがブルックフィールド夫人に對して持つて居た不純な氣持すべてを代表する人物と考えてもよいであらう。

カールウッド夫人レーチェルとの感激の再會の直後、蠟燭を片手に靜々と裳裾を長く引いて、階段を下りて来るベアトリックスの姿を見たエズモンドは、たちまち彼女の美貌に眩惑され、自分の過去をも忘れ去つて、ベアトリックスの美しさの奴隷となり、

「二つの明るい目が、十回ばかりまなざしを投げつければ男を屈服させるのに、彼を奴隷にし、彼を燃え上らせるのに、己れを忘れさせるのに十分だ。それは彼の目を眩ませ、その爲彼にとつて過去は忽ち朦朧となる。また彼はそれをこの上ない寶と考へて、これを手に入れるために生命を投げ出さうと云ふ氣になる。」

と云う様な状態になつてしまい、身も心も戀の情にひたり切つていたが、時に己が身を焼く戀の炎の危険を知つて、何度となく「魅惑者の前からさつと遠ざかり、長らくその人から遠ざかつている。」と云う戀病治療法を試みるがその甲斐もなく、ベアトリックスへの戀慕の情は抑え難く、ベアトリックスの目によく映る様に、危険を賭して戦功を立てるのである。

この様なエズモンドの獻身にも拘わらず、ベアトリックスはエズモンド

の愛を受け入れず、ハミルトン公爵と婚約するが、ハミルトン公爵も又カースルウッド子爵と同じくモーハン卿の手にかかつて殺される。そしてエズモンドはベアトリックスの心を贏ち得るための最後の努力、最大の試みとして僭王チャールズ・エドワードを英國に迎え入れ、アン女王の後釜に据えようと試みるが、まさにこの企ての成就せんとする時にあつて僭王はベアトリックスと駆け落ちした爲に機會を逸し、その企ても空しく水泡に歸し、それと共にエズモンドはベアトリックスへの戀より醒め果て、カースルウッド夫人の許に歸つて行くのであるが、エズモンドの愛は、このベアトリックスに對する虚榮にかられた戀を諦める事によつて、その中にあつた不純なものを捨て、昇華されたものとなり、カースルウッド夫人を得るにふさわしく結晶されたのである。

ベアトリックスへの狂わんばかりの戀も、今は惡夢と消え果て、丁度「エホバシオンの俘囚をかへし給しとき、我等は夢見る者の如くなりき。」と詩篇に歌われた所の解放されたイスラエルの如く、彼の愛は苦しい試練の時期を耐え忍び、その苦しみの過ぎ去つた今「笑はその口にみち、歌はその舌にみちて」、高らかに、

「たしかに愛はなべてを征服する。愛は一切の野心より遙かに勝り、富よりも貴重であり、名よりも高貴である。愛を知らぬ人は人生を知らず、それを味はつた事のない人は魂の至高の力を感じた事がない。私は今わが妻の名にかけて、希望が完全に叶へられ、幸福の絶頂に達した境涯を記してゐる。かような愛を持つ事は地上の一切の喜びがそれに比べると全然價値を持たない唯一の幸福であり、彼女の事を思ふ事は即ち神を讀へる事である。」

と愛の凱歌を唱えるのである。かくしてサッカレーは自分の愛を文學的實踐に於て淨化しそれに試練を與えて、永遠不滅のものとする事に成功

し、ブルックフィールド夫人との訣別に於て、種をたづさえ涙を流して出で行き、涙と共に種を播いたけれども、歡喜と共に收穫し、永遠の愛なる禾束をたづさえ、喜び歸つて來たのである。

エズモンドの物語は大體以上の様な経過を辿つて成立したものと考えられるのであるがこの物語はその成立當時の時代即ちヴィクトリア朝に對してその時代を眞向から否定すると云う大きな意義を有しながらも、又同時に結局の所、時代的背景に支配され規定される事によつてのみ始めて成立し得る物語であると云う點を見逃す事は出來ないと思う。

サッカレーがエズモンドの物語を書くにあつて十八世紀に時代をと、十八世紀の文體を模して書いたのは、決してスコットのなロマンチックな花咲ける騎士道時代を夢見たからでもなければ又デイスレーの如く Young England の夢想を抱いて居たのでもなく、自分の生きてゐる時代に對する不滿、現在の世界の缺陷の解決を十八世紀に求めたのもなかつた。サッカレーは Book of Snobs 等を見ても判る様にヴィクトリア朝の固定し膠着した社會と云うものに反抗していた。ヴィクトリア朝の社會に於ては人間性と云うものが Respectability に征服されてしまつてゐると彼にとつては考えられた。元來ヴィクトリア朝の文人の多くは色々の立場から、種々の方法でこの壓迫された人間性の解放を目指していたと云う點にその社會性が認められるのであるが、サッカレーはこの人間性が壓迫されてゐると云う事をブルックフィールド夫人との關係に於て、一しお身にしてみても感じたに違いない。

サッカレーがエズモンドの物語の中で意圖したものは人妻との戀愛の完成であつた。これを簡單直截な直説法で述べるならば世人の反駁を買



う事は、當時の社會心理よりして當然の事であつた。それ故にサッカレ  
ーはこれを述べるに當つて、直説法を用いずにあたかも小説の事件は過  
去に起つた事柄であり、作者の關心も過去にあると思はせる様な、いは  
ば接續法とも云える方法を用い、十八世紀と云う安全な世界に避難した  
のである。

そして又このエズモンドの物語はエズモンド大佐の晩年に於ける回想  
録と云う形を取り、新大陸に於て老いたるエズモンドが若かりし日の舊  
世界に於ける自分の波亂多かりし前半生を想起すると云う手法を用いて  
述べられている。

ヴィクトリア朝に於て英國の進歩主義者には、アメリカは人類新生の  
理想郷とされ、そこに於ては人間性を壓迫する世襲的な身分制度もな  
く、すべては自由であると考へられて居た。エズモンドとカースルウッ  
ド夫人の戀が、英國でではなく、アメリカで完成したと云うのは、エズ  
モンドの側に於ける愛の試練が終り、エズモンドの愛が純粹にして永遠  
のものであると實證された後も、エズモンドとレーチェルの二人は身分  
爵位等の支配する英國に於ては決して結ばれる事がなく、裸一貫の人間  
同志の眞の愛が完成するのは、その様な愛を育て上げるにふさわしいす  
べてが自由なアメリカの新社會でなければならなかつた事を示している  
のであり、又サッカレーのブルックフィールド夫人に對して抱いた愛情  
も決してヴィクトリア朝の英國に於ては完成せず、やはり何處かに理想  
の世界を求めなければならなかつたのである。そしてそのサッカレーの  
ブルックフィールド夫人に對する愛が求めていたユートピアは、最初は  
儚い諦めにも似た天國、死後の世界であり、二人の戀愛關係が破綻した

ヘンリー・エズモンドの成立

後にサッカレーがその愛情の推移を理想化して作り上げたものが、この  
ヘンリー・エズモンドの物語であつた。

ここで色々述べて來たことを、一まとめにして云うならば、*History of Henry Esmond* は多くの新しい要素をその中に含みつも、その發  
生の契機は眞にヴィクトリア朝的であつた、そして又逆説的に云うなら  
ば、その成立の契機が、ヴィクトリア朝的道德律であつたが故にこそ、  
そこに新しい酒をもることが出來たと結論づける事が出来る。

先にも述べた様に、エズモンドの物語を生むに至つた事態が、若し現  
代に於て起つたなら、問題は至極簡單であり、數カ月を出でずしてサッ  
カレーとブルックフィールド夫人はそれぞれ妻と夫に離婚訴訟を起して  
目出度く結婚したであろうが、事はそうは運ばなかつた。

偉大なものは困難を克服して成し遂げられるものであり、抵抗のない  
所には、偉大なるものは生れない。サッカレーの生涯に於て、サッカ  
ーがその母に對して、

「バーティからバーティへ、晚餐會から晚餐會へと、ニヤニヤ笑ひながらうろ  
つき廻り、相當多量の仕事をして、色んな事があつても、まあまあそんなに厭  
な顔もせずにいるながらも、私の心の中には持つて生れた、つまりぬ憂鬱がつき  
まとつて居ます。多分私の必要とするのは、誰彼と云ふ事なしに要するに女  
のでせう。そして何時の日にか、自分の心と云ふこの上ない貴重な寶石を、街  
の女に興へる事もあるかも知れませんが、物の本には何にもまして男は妻を持  
つべきだと書いてありますが、この自然のはけ口のない事が私を滅茶々にしま  
す。思ふに、これが私の惱みなので、若し結婚出來たなら、すぐに幸福にな  
り、樂になれると思ひます。」

と述べている様な苦しみがなかつたなら、そして又この様な苦しみをサ  
ッカレーに強ひ、それを強く感じさせる様な社會的な拘束がなかつたな

ら、彼は愛と云うものもこれ程強く感じないで、そして又これ程迄に愛と云うものに價値を見出す事も出來ず、その結果決してヘンリ・エズモンドの物語を書く事もなかつたであらう。

- (1) Greig; Thackeray: A Reconsideration. p. 4.
- (2) Ray (ed.); The Letters and Private Papers of William Makepeace Thackeray; vol. iii p. 183.
- (3) Vanity Fair; chap. 2.
- (4) Ray; vol. iii p. 395.
- (5) *ibid.* p. 708.
- (6) *ibid.* p. 736.
- (7) *ibid.* p. 761.
- (8) Ray; vol. iii p. 24.
- (9) Ray; vol. ii p. 445~6.
- (10) *ibid.* p. 272.
- (11) Ray; vol. iv p. 437.

- (12) *ibid.* p. 470.
  - (13) *ibid.* p. 428.
  - (14) *ibid.* p. 430.
  - (15) *ibid.* p. 431.
  - (16) *ibid.* p. 429.
  - (17) Ray; vol. ii p. 811-2.
  - (18) Henry Esmond; BK. I. Chap. VII
  - (19) *ibid.*
  - (20) *ibid.* BK. I Chap. IX
  - (21) *ibid.* BK. II Chap. VI
  - (22) *ibid.* BK. II Chap. VII
  - (23) *ibid.* BK. III Chap. XIII
  - (24) Ray; vol. ii p. 813.
- 附記 Henry Esmond の譯は、京都大學村上至孝教授のもの（新月社「ヘンリ・エズモンド」から拜借させて頂いた。ここに感謝の意を表する次第である。